

総合基礎実技アーカイブ～その意義・目的・方法について

本学美術学部は、専攻別の入試と教育を行う一般の美術系大学と異なり、実技系における統一入試や、専攻での専門教育に並行する全専攻横断型のカリキュラムなど、特異といえる教育体制をとっている。背景にあるのは、1970年の大学改革案である。そこでは各専門分野の分立に先立つ造形芸術全体の共通の課題があること、また学生個々人の自主的な学びの姿勢と意思決定を促進・尊重することが唱えられた。それに対応するシステムとして、専攻の撤廃と研究テーマによる工房制が提案されたが、現実には、工房の物理的制約や専門教育の一貫した質の確保などの理由により、改革案を全面的に実施することはできず、1980年の再検討により、造形（美術）科・デザイン科・工芸科の3科11専攻体制になり、現在に至っている。

だが、当初の改革案の中ですぐに実行に移され、現在も継続して実施されている独特なカリキュラムがある。その代表的なものが、新入生全員が1年次前期の半年間にわたって履修する全専攻横断型の実技カリキュラム「総合基礎実技」である。

「総合基礎実技」は、改革案が出された翌1971年に「共通ガイダンス」という科目名で始まった。その際の「実技運営指導計画案」には次のように目的と方針が述べられている。

「将来この学生が、各自の専攻分野を選択するためのガイダンス的な性格と、“あらゆる美術の根本は共通である”という思想に基づく、造形基礎教育的性格を併せ持つものである。」

「造形の基礎とは、単なる技術の伝授や、造形形式における要素訓練などの造形手段にあるのではなく、改革案というイメージの創造につながる美的直観力や感覚の陶冶、創造性の開発等、美術活動の根底的なものでなくてはならない。このことをふまえた上で、限られた物的、人的、時間的諸条件の中で、可能な教育システムとして、4教室12週の授業を計画する。これらは、各担当教員の専門的体験にもとづき、個性的、創造的に行うものとする。」

以後、40数年にわたって、さまざまな見解や立場の対立をはらみながらも、年毎にさまざまな専攻の教員が集まり、相互触発的に課題を創出しながら運営を続けてきた。それらの多様な課題の創出過程とそれに応える学生作品の変遷は、そのままわが国の芸術思潮と芸術教育の先鋭な歩みの一端を示すものといえる。

しかしながら、半年ごとに入れ替わる断続的な組織体制も一因して、授業内容とその変遷が一貫した資料としてまとめられたことはなかった。「総合基礎実技アーカイブ」は、過去から現在に至る総合基礎の課題とその成果、および指導体制を順次資料化し、アクセスしやすいかたちで整備することによって、本学部独自の芸術教育をさらに充実させる確かな「礎」の創出をめざす。と同時に、芸術の創造・研究・教育に取り組む人々に豊かな造形教育のアイデアソースと考察材料を提供し、創造的な芸術文化の振興に貢献できればと考える。

今年度が始まったアーカイブ化の作業は、授業のない後期に、原則として週に半日、2名の総合基礎非常勤講師と当方が手探りで取り組んだ。まず現物資料の一貫した整理を行い、パソコ

ンやスキャナー、ハードディスクなど必要最小限の機材を配備した。中心的な作業内容は、各カリキュラムと作品記録および関連資料のデジタル化である。のべ138時間足らずでの作業の成果は、1971年度・1972年度全体と1973年度・1974年度の一部であり、今後の作業ペースに一定の目安を得た。一方で、文化アーカイブに関わる情報技術の専門家を招いた公開講習会も開催した。

今後とも継続して取り組み、公開を図っていくなかで、課題の意義・関連性・可能性を明らかにし、創造的な研究教育に直結するアーカイブを形成していければと思う。